



「家族の生活」は子どもの成長とともに変わる

1学期の終業式直前に発行した「三中だより 7月号」で、この夏休みに「保護者がお子さんの意見や感想を傾聴する」など「積極的な家族の時間」をつくってほしいことを書かせていただきましたが、いかがだったでしょうか。

家族の生活ぶりの変容は一様ではありませんが、子どもの成長とともに変わることが多いと思います。もちろん、子どもの成長ぶりや個性もそれぞれ異なるため、すべての家族の生活ぶりが同じように変わっていくわけではありませんが、傾向として以下のようなことは言えるのではないかと思います。

子どもが乳幼児から小学校低学年のころは、一日一日の子どもの成長が目に見えて分かることが多かったり、子どもが話すようになってからは気付いたこと・感じたこと・今日あった出来事などを子ども自らが表現することが多く、子どもから提供される話題が家族の会話になったりすることがよくあるため、子ども中心の生活になる傾向があります。保護者は就労で忙しかったり、業務でトラブルがあったりするものの、何とか時間の調整を付けて、子ども中心の家族の時間をつくり、子どもの興味や指向に合わせて外出したり、保護者の親の世代なども含めた3世代の交流を楽しんだりすることもあるかと思えます。

一方、子どもが小学校に入学すると、子どもがテストの結果を持ち帰ってきたり、「あゆみ」など呼称は異なるものの、いわゆる通知表を学校からもらってきたりするため、学習に関する話題を保護者から投げかけることも出てくることもあるかと思えます。ただし、「結果」中心に話すのと、「過程」中心に話すのとでは会話の内容が変わるとともに、低学年のうちは保護者の子どもの学習状況に対する関心の度合いは、子どもの友達などとの人間関係や子どもの成長を含む健康管理などと比較するとシェアはやや少なく、学習に関する話題にかける時間はさほど多くないかと思えます。また、子どもが小学校に通学しているうちは、子どもが今何を学習していて今日の宿題は何か、よく一緒にいる友達是谁か、子どもが今気にしていることは何かなど、多くのことを保護者自身が把握しているので、子どもの変化にも気づきやすく保護者の管理下にある場合が多いと言えます。

それが、子どもが中学校に入学すると、今までの交友関係に変化が起きます。入学直後は部活動に参加していないため下校が早く、帰宅後の子どもたちの地域における遊びなどにも変化が起きてきます。また、部選びについて保護者が相談に乗るなどのことはあっても、入部すると、子どもの放課後の部活動が始まり、1年生の夏休み以降は、子どもによっては部活動が学校生活の中でかなり高い優先度をもつようになっていきます。

そもそも、中学生という時期は、大人との関係よりも、友人関係に強い意味を見いだすようになっていたり、だからこそ仲間同士の評価を強く意識するようになっていたりするようになります。また、親や友達と異なる自分独自の内面があることに気づきはじめるとともに、それがいいことかどうかについても考え込むこともあります。つまり、自分を客観視(メタ認知)するようになり、自分はどういう人間か、どんな特徴があるかに正対し始めるようになる時期です。時に、親に干渉されたくない、親に反抗したくなくなってしまいう反面、不安や悩みを抱えている、いわゆる思春期です。前述した、子ども中心の家族の時間のようにはなかなか行かず、保護者が自らお子さんの意見や感想を傾

聴したり、意思を確認したりする時間を取ってつくることにより、家庭という場でお子さんが自己の立場や居場所を確認することができるようになります。また、自分はどういう人間かを再認識することにつながることで、子どもにとっては不安や悩みを話しやすくなり、保護者にとっては変化に気づきやすくなるという意味では、保護者からの働きかけはとても重要なことです。

こうして、「家族の生活」は変容していきますが、このような変容の軌跡を描いていくことにより、子どもが青年中期、いわゆる高校生くらいになったとき、家庭という安定した基盤の中で、親の保護のもとから、自立した大人となるための最終的な移行時期を迎え、時間の多くを自分のために費やす傍らで、地域の子どもの存在ではなく、自立して家庭に貢献したり、自ら地域の活動に参加したりする青年になりやすくなっていきます。

ぜひ、今後とも、「積極的な家族の時間」をつくっていただけるよう、保護者の皆様も意図的なお子さんへの関わりをしていただくようお願いいたします。

「努力は必ず報われる」のか

子どもたちから、「スポーツでも受験でも、将来のビジネスでも、努力すれば必ず報われるのか」と問われれば、「それはなんとも言えない」としか回答のしようがありません。努力した人が皆優勝したり合格したり、将来のビジネス界で大成功を収めるわけではないでしょう。

しかし、「石の上にも三年」「牛歩の歩みも千里」「ちりも積もれば山となる」や、「一念通天」「積土成山」などのように、同じような意味をもったことわざや四字熟語が我が国には存在します。

また、スポーツ選手・研究者や漫画の主人公も「努力」と「報われる」などを使って、今では格言とも言われるようになったコメントや台詞を残しています。

さらに、「学力・就職・健康などの幸せに関することは、環境・時代や運によって決まる」と考えている人よりも、「自分の未来のことは自分自身の努力によって左右することができる」と感じている人の方が、人生の様々な事柄が実際に上手くいきやすくなると言われることもあります。

つまり、「努力する」ことは「報われる」ための十分条件ではないにしても、必要条件ではあると言えます。最も、子どもたちは、小学校に入学してから、学級活動などの時間に担任の先生から「努力している(頑張っている)姿はとても立派です」と教えられたり、道徳科の「努力と強い意志」という内容項目で子どもたち自身が努力の価値について考えたりしてきているので、「努力することが必要条件である」という認識はもってなくても、努力することの大切さは知っているはずで

ここで重要なこと「努力する」と「報われる」ということをどのよう捉えるかです。

1 「努力する」とはその人の主観である

Aさんの「努力した」と、Bさんの「努力した」について、その程度を比較することはできません。量と質を比較する場合、量については時間や回数で単純比較できますが、質については様々な要素が含まれるためAさんとBさんの話を聞いたとしても、どちらの方が努力したのかについて正確に判断することはできないと思います。

ただし、保護者の方から見て、お子さんが到底努力しているとは思えないと感じても、お子さんの「自分は頑張っている」という発言を、頭ごなしに否定することは控えてください。なぜなら、それがお子さんの主観だからです。たとえ、時間や回数などの量が明らかに少ないと判断されたとしても、質は分かりませんので努力の内容を聞く必要があります。

努力の質を子どもたちに理解させること、これが私たち大人の大きな課題となってきますが、このことは、次の「2」が大きく左右してきます。

2 何が「報われる」ことを期待しているのか

要するに目標です。

「中間考査のときよりもたくさん勉強する」「できるだけいい成績を残す」、これらは目標とし

て間違っている、あるいは曖昧です。

まず前者は、努力の量自体を目標にしてしまっています。教科書や問題集を開けていることを努力と捉えているなら、その時間を増やしたからといって、期待した結果にはつながりにくいでしょう。次に後者は、スポーツでも勉強でも使われることがあります、「できるだけ」というのは、努力の量や質を、自分のそのときの気分や意志の強さ次第で調節できてしまうので、最初から自分の逃げ道をつくってしまっており、努力の質の低下に大きく影響してしまいます。

目標があって努力があります。ですから、子どもたちはより具体的な目標を設定する必要があります。つまり、「国語は記述式の問題で減点が多かったので、授業でやった記述式の学習課題を中心に勉強する」「数学は時間ぎりぎり計算の見直しができなかったので、絶対に1回でミスのない計算ができるようにする」「新人戦では初戦敗退だったので決勝進出を目標にする」「自分がスマッシュを打った後の相手のドロップショットを拾えるようにする」「パートリーダーとして楽譜通りの音を出すだけでなく、曲調に合わせた音質が出せるようにする」などのように、自分の課題を明らかにした上でより具体的な目標を立てることが、努力する方向性や、どの課題に関してはどれだけ続けて学習・練習したらいいかという継続性、何にどれだけの時間や回数をかけるかという計画性など、「努力の質」を高めていくことになります。

子どもたちにとって、質の高い努力をたくさんこなすというのは体力的にあるいは精神的につらいことです。しかし、それが「努力は必ず報われる」の真の必要条件となります。

部活動については、教育課程外の活動として、学習活動については定期考査前2週間から学習計画表を作成させるなどして、学校で指導いたします。ただし、3年生の保護者の皆様、お子さんの進路決定、あるいは受験につきましては、保護者の皆様の強いご協力も仰ぎたく存じます。この夏休み、お子さんと高等学校などの上級学校を見学された方もたくさんいらっしゃると思いますが、お子さんの努力の質を早くに高めるため、どこを志望校とするかについて、「積極的な家族の時間」をつくって保護者の方とお子さんで同じ考えに至ってほしいと思います。

このテーマの冒頭で申し上げたとおり、必ず希望の進路実現、あるいは合格するとは限りません。しかし、これは、1・2年生の保護者の方々にも申し上げたいのですが、「報われる」というのは、決して短期的な目標到達を意味するものではないと私は考えています。早くに具体的な目標を設定し、質の高い努力を正しい方向性で継続的・計画的に行うなど、熱中することをもってのこと自体が子どもに幸福感を与えるのです。また、その経験をした子どもは、これからの人生の課題に直面したときに、不屈の精神で、いかにして乗り越えるかという力を発揮します。そして、社会を構成する一員から国家を支える社会人となり、最終的には、それまでの努力が「報われる」ことになると言っても、私は過言ではないと信じています。

今日は「防災の日」

本日は「引渡し訓練」を実施する予定でしたが、新型コロナウイルス感染拡大状況を鑑み中止とさせていただきます。ただし、荒川区教育委員会では、「震度5強以上の地震の観測」や「荒川区災害対策本部による高齢者等避難の発令」等の際には、児童・生徒を保護者等に引き渡すこととしております。その場合は、本校だけの問題ではなく、荒川区全域の対応となっているはずですが、いたがしまして、保護者の皆様は、勤務場所などからお子様を引き取りに来ることとなり、ご家族の構成によっては、複数のお子様を引き取らなければならないこともあり得ます。

複数のお子様を引き取るとき、地理的な条件もあり一概には言えませんが、原則としては、なるべく発達段階の高いお子さんから引き取って、保護者の方とともに機動性を発揮し、その後、順に小さいお子様を引き取りに行くことが望ましいとされています。

保護者の皆様は、お子さんが学校や園にいるのならば安全であるとお考えください。災害が発

生した場合、保護者の方も勤務先で被災者になっている場合もあります。急がず、慌てず、落ち着いて行動するようにし、二次災害に巻き込まれることのないようにしてください。

さて、本日、9月1日が「防災の日」とされたのは、昭和35(1960)年6月11日の閣議で了解されたことに始まります。皆様すでにご存じの通り、9月1日は、関東大震災が発生した日であるとともに、台風シーズンを迎える時期でもあり、昭和34年9月26日の「伊勢湾台風」によって、戦後最大の被害を被ったことが契機となって、地震や風水害等に対する心構え等を育成するため、「防災の日」が創設されました。

先月中旬、西日本から東日本の広範囲にかけて大雨がもたらされ、地域によっては線状降水帯も発生し土砂災害、冠水などの被害に遭いました。

本校では、これまで、年度当初保護者の方にご提出いただいていた「生徒理解のための資料」を改訂し、今年度から「保護者引渡しカード」の内容を一体化させ「生徒理解・保護者引渡しのための資料」としてご提出いただくようにいたしました。また、本校教職員の人事異動とともに、本年5月に改訂された「避難情報に関するガイドライン」に合わせ、防災計画(震災編)(風水害編)も改編し、本校ホームページ(「学校概要」⇒「防災計画」)に掲載いたしております。風水害編には内水氾濫・冠水を想定した計画も記載されておりますので、お時間のあるときにご覧ください。

さらに、先月の水害発生時にも頻りに気象庁が「危険度分布」を国民の皆様を示して説明しておりましたが、いざというときの自主的な避難の判断に活用してもらうことを目的として、本年3月に愛称を「キキクル」としましたので、本校ホームページ上でもリンクできるようにしております。「どのサイトでどのような情報を入手できるのか」「拡大して荒川区の状況がどこまで分かるのか」など、災害が発生していないときに閲覧していただき、荒川区が避難情報等を発出するときには、すでに心構えができるようにしておくことも自助・共助の一つではないかと思えます。



PCによる本校ホームページ・トップ画面。スマートフォンでも、こちらの画面に切り替えることにより、外出先から閲覧することができます。

お知らせ

- 鶴山裕有未教諭が無事に産休に入りました。代替として8月14日から、加藤 恵 教諭が、1年副担任・英語科として着任しました。よろしくお願いいたします。